
青春謳歌

三木拓矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春謳歌

【Nコード】

N2501I

【作者名】

三木拓矢

【あらすじ】

文法ってなに？

王道なんだそりゃ食べ物か？

外道？ごめん、聞いたことないや。

そんな感じの作者（私）が書く世界でもっとも不真面目な青春型ラブコメ風物語（私を知る中で）

青春？ それは青い春のこと。

恋愛？ そりゃ恋と愛がドッキングしたした単語のこと。

青春謳歌？ それは自称通称気分屋な作者がふと閃いたことをただ物語にただだけの言わば十一流小説のこと。

第1唱 始まりってこんなもん

「今日ってなによ」

「なによってなんですか？」

「今日はなんなのかって聞いているのよ」

「いや、そんなこと言われても」

「いいからなにか言ってよ」

「いいからなにか言いなさい」

悩むなあ。

なにを言っても成功する気配はないし。

むしろ失敗の道しか見えない。

やっ、どうしたもんかな。

「うーん……こんにちは、とか？」

「馬鹿って万歳」

「そんな馬鹿なこと言わせたのは君だろうが！！それなのにもかかわらず酷い言いようだな、おい！」

かなりぐだぐだなスタートで本当に申し訳ないかぎりです。

この物語で一応主人公語らせていただきます中枝春冬です。

かなり普通の高校生やっています。いやあ、平和な世の中さまさままで

すね。

今日も激しくお日柄も良く、実に幸せで。

「ところで中枝君」

と僕を呼ぶのは学年でもトップの美人を誇る沙野彩香さんです。
うん、美人。

「何かな、沙野さん」

「あたし達が友達になった時から1つだけ聞きたいことがあったのよ、それをせつかくだから今聞いていいかしら？」

なにがせつかくが全く分かんないけど、なにかあったか今日って？

「……まあ、いいけど」

沙野さんはそこでわざとらしく一呼吸おいてから口を開いた。

「なんでそんなに中枝君って馬鹿なのかしら」

「うるせえよ！そんなことずっと聞きたかったのか君は？」

「あら、駄目だった？」

「うっ……駄目だよ」

不覚にも一瞬、駄目じゃないって言うところだった。
恐るべき美人の罠！

一度引つかかったら二度と抜き出せない！

「しかし暇よね」

「・・・そこは話を変えたら駄目だろ」

「だって、あたしが美人の話はもう聞き飽きてるんだもの」

「はっ？僕そんなこと言ってない……あっ！もしかして僕の心の声を」

「エスパーかこいつは！」

リアルに恐ろし過ぎる能力だ！

どうという原理だ！？

沙野さんはそこでクスリと笑った。

実に絵になる笑い方である。

「あたし、超能力とかってあんまり信じてないのよね」

「僕はたった今超能力があるって信じたよ」

「ふうん、なかなかロマンチストね、中枝君って」

いや、僕だつてこの耳でエスパー発言を聞かなければ僕だつてそんなもん信じなかったさ。

お化けなんかこの世にいないしUFOの宇宙人なんて存在しないしサンタはそりに乗ってプレゼントを届けには来ないし神様だって都合の良い時だけお願いしたって叶えてはくれない。

世の中はそういうもんだ。

「そんなこと言われてしまうと幽霊のあたしは反応に困ってしまう

わ

「幽霊！？沙野さん幽霊だったの！？」

全然知らなかった。

でもなんか納得。

言われて見てみると確かに肌は色白気味だし。

幽霊は美人が多いって言うけど意外と本当なんだな。

「全く知らなかった」

「ああ、それはあたしが宇宙人だからね」

「宇宙人なの！？幽霊なのに！？」

「そう、友達からもらった翻訳こんにやくのおかげで日本語が分かる設定」

「21世紀にネコ型ロボットの知り合いが！？」

……今が21世紀でした。

「だって、こないだ知り合いの子がタヌキ型ロボットが欲しいって言うから」

「サンタさん！？」

もしかして今日赤と白の靴下履いてたのは、これへの布石だったのか！？

あとタヌキ型がじゃなくてネコ型ね。

……本人怒るぞお。

いや、人じゃないから本ロボットか？
うゝむ、あまり巧いこと言えてない、これはボツネタだな。

「……なんで人の靴下の色知ってるの？」

ウルトラミス！

やっちまいましたあ！

「や、それは靴下の色のチェックでして」

「なんでチェックする必要があるの？」

「サンタさん!？」

「誤魔化さない」

いや、だって沙野さんの目が怖いし。

一体僕で何をする気ですか!？」

「ふふふ……」

楽しそうに沙野さんは笑う。

僕はちつとも楽しくないけど。

や、さすがにそれは不味いんじゃないですか？
そんなことされると僕が危険だから、ねっ。

もう止めようぜ……。

止めようや……。

ぜひ止めて下さい。

「本当にまじでお願いします！」

「なにがかしら」

なにがって、人の心読めんだろあんた！

つつか目が笑ってないよ、顔はとても良い笑顔なのに目が据わって
るよー。

「いやあ、美人が笑うと実に可愛い絵だね」

「あら、ありがとう」

だったらもつと嬉しそうな顔をしてくれ！

じりじりと一歩ずつ彼女との距離が縮まっていく。

何故だろう、美人が近づいて来てるのに心はちっともドキドキしな
い！

ワクワクもしない！

むしろ、ガクガクいってます。

「大丈夫よ、痛いのは最初から最後までだけだから」

「それって結局僕は痛い目にあうってことじゃ」

まだ第一回目にして主人公ピンチって、どんな物語だよ。

「だ……駄目だろ 女の子がそんなことしちゃ」

「それも大丈夫よ、こんなことあなたにしかしないから」

「いや、周りに見られるから」

「男はうだうだ言わないものよ」

「うだうだって、僕の方言ってること正し……うわああああ」

悲痛な僕の叫び声が教室に響き渡る。

やっぱりこんな物語止めちまえ。

薄れゆく意識の中でそう思う僕だった。

第1唱 始まりってこんなもん（後書き）

いや、初期の青春謳歌からだいぶ変わってしまいましたが まあ
こんなもので。

中枝君の言う通り早く終わってしまうのかなあ。
あんまりそんなことはさせたくないですね。

第2唱 色々って色々

「あたし、中枝君のこと好きよ」

「僕も沙野さんのこと嫌いじゃないよ」

「嫌いじゃない、という表現はあたし的には好ましくないわ、好きか嫌いかで答えてちょうだい」

「む、まあ好きだけど」

「まあ、という表現は・・・」

「好きです!」

「あら、好きの前に大はつかないのかしら」

野郎。

好き勝手に言いやがって。

や、皆さんこんにちは。この物語で一応主人公語らせてもらってます中枝春冬です。

……先に言っておきますけど今の会話を聞いて、ひゅーひゅーこのバカップルとか思った奴ら!

僕達をまだ完全に理解できてない!

この会話は、その、あれ、国民的ギャグマンガに例えると、あのネコ型ロボットの出てくるあのマンガの第2主人公的ポジションのダメ眼鏡君とヒロイン的ポジションの同級生の女の子の絵ではな

くて、むしろダメダメ眼鏡君と歌の下手ないじめっ子的ポジションの絡みが一番近い感じた。

それだけで分かってくれると僕としては凄く助かる。分からないって人はSFのことをこれからは少し不思議と思ってくれば大丈夫だ。

……まあ、問題大ありだけど。

「つまり、早い話が中枝君は今あたしにいじめられてるってことでしょ？」

「そんなストレートに言うなや!!」

せつかく上手に誤魔化したのに!

そういう風に読者から思われるの嫌だったから誤魔化してたのに!

「それだと中枝君、マゾみたいに聞こえるものね」

「直球勝負反対だ!!」

「あら、あたし基本は変化球タイプのピッチャーなのだけど」

沙野さんは胸を張ってそう言った。

言ってることは大して可愛くないが見た目が可愛いから許そうかなあ。

- - 僕って沙野さんに甘いよなあ。

「得意球はスローカーブよ」

- - 許す!

みんなから甘いって言われても許す!

や、別に許す理由はどこにもないんだけどさ。
なんか、ねえ。

いやあ説明なしでもこれは分かってほしい。
そういうもんだって。

「ついでに中枝君はバッタータイプね」

「はあ、打順は？」

「トップバッターな1番」

「おっ！なかなか好打順じゃん」

てつきり9番とか言われるかと思ったけど……。
トップバッターとか結構良い位置にいるじゃん。

「ただし」

と沙野さんは続けた。

「……続けなくていいのにな。」

「そのチームは2番から上位打線」

「……」

「……」

「……僕の立ち位置へぼっ！」

「うん、へぼいわ」

それって結局立ち位置的には9番打者と一緒じゃん。
下位も下位の低位打線である。

大体、2番から上位打線ってことはそのチームはトップバッターが
らいきなりアウトになれと？

「そのへばさに何の意味が？」

「意味なんて、後から考えるものでしょう？」

「……ええ〜」

確かに格好いいセリフだけど！

なんか違う！なんか違うだろ、それ！

使い道絶対間違ってるから！

いやそんな決まったぜ、みたいな顔されても！

「だって決まったんだもの」

「自分で言っちゃった!？」

「あなただってかつこ可愛いって言うてくれたじゃない」

「可愛いまでは言っていないぞ」

「可愛くない？」

「うん、まあ可愛いけど」

「まあ、という表現はあたし的に……」

「可愛い！可愛い！超可愛い！」

「そう、照れるわね」

顔が可愛いのに相も変わらず態度は可愛くない。

それなのにかかわらずあまりムカつかないのは多分沙野さんの加減具合だろうな。

実にさすがというところだ。

「や、さすがだね沙野さんは」

「ん？何のこと？」

沙野さんは意地の悪い笑みで答えた。

本当は分かっているくせにあえて分からないふりをするあたりから、もう可愛い過ぎる。

「色々だよ、色々」

「ふうん色々ね」

「そう、色々」

「ふふ、さすがね中枝君は」

「ん？何のことだ？」

「色々よ、色々」

「ふうん色々か」

「そう、色々」

なんかいいなこういつって、色々よ。

そんなアバウト……というより少し雑な感じで今回は終わってっつ。

僕の妹は変態です

「お兄ちゃん起きてー」

と、休日としては朝早いAM7時。

起きぬけの眠たい目をこすりながら声のした方向、つまり自分の布団の上に目を向ける。

すると布団の上には小柄な少女が乗っかっていた。

うん、いつも通り。

「どうした妹」

「おはようお兄ちゃん。今日も朝からカツコイいね」

みなさんおはようございます。

一応この物語で主人公語らせてもらってます中枝春冬です。

決して主人公をやっているのではなく語らせてもらっているです。

主人公で語り手と言う意味ではなく、主人公を語らせてもらってますという意味です。

お間違いない！

「で、朝からなんの用かな愚妹君」

「ふっ、よくぞ聞いてくれたなお兄ちゃん」

そう言って上の妹、中枝夏は不敵に笑った。

なんだこいつ。

僕はこんな奴妹にした覚えはない。

「前置きはいいんだよ。早く言え」

「お兄ちゃん、今の時間は？」

「7時」

「ラッキーな数字と云えば？」

「5」

「そう、7なんだよ」

いや、7とは言っていない。

普通ラッキーな数字と云えば5だろ。

ご縁があるの5。

「まあ、つまりお兄ちゃん大好きのおたしは少しでもお兄ちゃんに幸せになってもらいたいなと思って朝の7時に起こしに来たのさ」

聞いて損した。

お兄ちゃん大好きとか平然と言うな。

「アホの子はリビングに戻れ。僕は寝る」

そう言って布団に潜りこんで2度寝をしようとした僕の腹部に衝撃がはしる。

「ほらほら、早く起きないと大変だよ」

「……………く」

「ここがいいのかな？お兄ちゃん」

「や……やめ」

「んー？声が小さくて聞こえないなあ」

「……あ……っ」

「ふふっ、もっと良くしてあげようか？」

「……無理……」

「お兄ちゃんの辛そうな顔を見ると……凄くゾクゾクする」

恐るべき変態である。

我が妹ながら。

一応言っておくけれど別に変な事はしていないし、されていない。夏が布団の上から僕にヒップドロップを連続でやっているだけである。

……あれ？だけの使い方ってこれであってたであろうか。

……まあ、いいか。

つかいい加減苦しくなってきた。

「……止め……」

「病め？」

「言っていない！」

思わずツッコむ僕。

余計に苦しくなってしまった。

「……止め………て……くれ」

「しょうがないなあ」

と夏は笑顔で言った。

ああ、多分こういうのを凄惨な笑顔と言っただろう。
絶対悪いこと企んでる顔だ。

「その代わりお願いがある」

やっぱりである。

これだから女ってやつは。

「わたしにキスをしろ！」

「無理、やだ」

即答なまでの即答。多分答えるまでに1秒もかかっていない。
なんとなく予想はついていただけ。
やっぱりか。

「ならばここで死ね！」

「お前既に病んでるよ！」

「恋愛なんてのは一種の病気みたいなものだからね」

「恋愛するな」

「恋に恋する女子中学生に対しそんなこと言う!?!」

「じゃあ対象を変えろ」

「年上好きなんだよ!」

「知らねえよ!僕を巻き込むなよ!」

「兄好きなんだよ!」

「僕しかいねえじゃん!」

なんかグダグダだ。

グダグダグダグダ。

「キスをするまであたしはここを動かない!」

「兄妹でキスなんかするか!」

「外国ではスキンシップで家族同士でキスするよ?」

「ここ日本だから」

その後も散々どうでもいい会話が続ける僕らだった。

結局下の妹の秋がくるまで僕は拘束されたままであったという。

我ながら情けないくらいの草食系。

ちゃんちゃん。

……この終わり方ってどうなんだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2501i/>

青春謳歌

2011年10月10日11時19分発行